

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

生活世界の身近な水の器

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4600

1 生活世界の 身近な水の器

久保正敏

常温の生活世界で形の定まらない水を扱うには、器が必要だ。水を飲むという根源的な利用だけでなく、生業、調理、衛生、嗜好などさまざまな場面でも器が使われるし、儀礼における清めなど水のシンボル作用と結びつく器もある。民博所蔵の資料約27万点の中にも水の器は数多い。試みに、名前に「水」を含む資料を検索し、そこから動詞を抜き出すと、「灌水、汲む、運ぶ、揚げる、貯める、溜める、掬う、飲む、指す、差す、注ぐ、次ぐ、垂らす、売る、漉す、切る、供える」などが見られる。他にも、「洗う、清める、遊ぶ、火を消す」など、飲用以外の用途としての水を表現する動詞もある。器の形を表す用語について調べると、柄杓、杓子、椀、カップ、コップ、壺、甕、樽、筒、鉢、皿、やかん、水差し、水すくい、水入れ、容器など、さまざまだ。これらすべてをあわせると4000点あまり、このように多様な水の器の世界をすべて言い尽くすことは難しい。そこで、人にとって根源的な飲むための水が口元に至るまでの、生活世界での「水の道程」から考えてみよう。

人びとは地域の環境に応じて、地下からの湧

水、雨水、川などさまざまな水源から水を得てきた。実際の生活場面で水を得るのは、井戸、水汲み場、水道栓など水源と生活世界をつなぐ「取水口」である。そこから水を得て口元に至る水の道程に必ず登場するのは、「汲む」「運ぶ」「ためる」「注ぐ」「掬う」といった基本的な用途の器だろう。そこで、これらの器を中心に資料を選んでみた。

「汲む」「掬う」器には、つるべ、水汲み、柄杓、杓子、「運ぶ」器にはバケツや水入れ、「ためる」器には甕、壺、鉢がある。大型のためる器は雨水や地下水をためる共用の器であり、そこから各家庭や個人へ分配される過程で、持ち運び可能な器は「運び」、その後「ためる」機能も持つ。「注ぐ」器には、やかん、水差しがあり、加熱や冷却の機能を持つものも多い。また、ためた水は「掬う」器で口元の器に移される。もっとも、こうした分類は便宜的なものに過ぎない。道具はさまざまな用途に転用できるところにその特質があるのだから。こうした水の道程をたどるうちに器は徐々に小型化し個人化が進むが、その極は、個人携帯の水筒だろう。



写真1*
川から水を汲む
(撮影：梅棹忠夫 1985年、中国福建省)



写真2
カナダの水汲み、カナダ
長さ42.1



写真3
水汲み容器、北海道
長さ34.8

共用から個人へと至る水の道程を支えるこれら基本的な器は、水の分配や提供と言った人と人の関係を媒介するメディアでもあるのだ。

地域の環境・技術・利用状況を映す器の素材

人は、手のひらという身体を器とする次の段階として、動植物から得られる自然素材に簡単な加工を施した素朴な器を利用するようになり、さらにその後、土器・陶磁器・金属加工品・ガラス製品・工業製品などを発達させたのだろう。

植物起源の器

適切な植物資源が得られる地域では、樹皮をしぼったり、タケ、ヒョウタン、ヤシなど中空の形状を持つ植物を加工して、水の器として用いてきた。土器の発明後もずっと使われ続けてきたこれら素朴な器を見てみよう。

樹皮製について見ると、熱帯地域ではヤシの葉、オーストラリア・アボリジニの人びとはユーカリの樹皮、北米北西海岸地域の人びとはヒノキ科シダーの樹皮（写真2）、北方の人びとは白樺の樹皮など（写真3）、地域の特性を反映した素材と技術を用い、水汲みや碗などを作ってきた。樹皮を加熱して曲げる技術も発達した。

利用後に殻を残す果実も便利な素材、熱帯を中心に広い地域で栽培されるココヤシの殻は碗となり、柄をつければ柄杓になる（写真4）。

人類最古の栽培植物の一つ熱帯性のヒョウタンも世界各地に広がり、軽くて丈夫、加工しやすい器として土器に先立って世界各地で出土するし、土器を持たない文化では器として有用だ。儀礼や、酒や茶の容器に使われる器には、表面に飾りを施したり彩色する例も多い。古代中国では中空のヒョウタンの中に異界があるとされたし、また多くの地域では水のシンボルとみなされてきた。民博にも世界中のほとんどの地域から約400点が収集されているが、中でもアフリカのサバンナ地域の資料が多い。これは、同地域での液体の保存と運搬に最も良く用いられているのがヒョウタンであることを示す（写真5）。また、バオバブの実も水筒に使われる。

タケは、温暖湿潤な赤道を中心とする南北の緯度35度までに最も多く自生する。なかでも、世界の竹林面積の約8割を占める東南アジアとインドの熱帯バンブー類は、^{かん}稗の直径が30センチになる世界最大のゾウタケから細いものまで種類は豊富で、水の容器として重宝された。運ぶ器としても、太い竹筒に紐をつけて背負ったり、細い竹筒を何本も竹籠に入れたり、水筒に仕立てたりと、さまざまな利用法がある。また、タイ・ラオスでは、竹を編んで漆や樹脂を塗り保水性を与えたものも多い（写真6）。

また、ケニアの木の根を編んだ籠は、ラクダの鞍に結び付けて運搬に用いられるものだが、適度の通気性が水の気化熱による冷却効果を生



写真4
柄杓、タイ
長さ27.9



写真5
水汲みヒョウタン、カメルーン
高さ46.7

写真6
水汲み用天秤籠、ラオス
高さ44.2



写真8
貝製容器
カロリン諸島ヤップ島
長さ 29.9



写真7
山羊の毛皮製水売り用水入れ
モロッコ
長さ 104.0



写真9
飲料水用冷却壺
モロッコ
高さ 51.9

むという、その地域の知恵を映している。

木製の器も、椀状のもの、塗りを施したもの、壺状のもの、杓子状のものが各地に見られ、加工の容易な樹種の存在と木工技術の発達した地域を示す。

動物起源の器

狩猟や牧畜地域では、動物の胃袋や膀胱などの内臓や皮で作った袋の利用が多く、とくに植物資源の乏しい乾燥地域や長距離を移動する遊牧民の間では、羊や山羊の皮を縫い合わせた水筒（写真7）、キリン、牛や羊の胃袋を使った水筒などがよく見られるし、ダチョウの卵の殻も水筒になる。北方地域ではアザラシの胃袋を用いる容器があるほか、牛の角や象牙を用いる角杯・水筒の事例も数多い。いずれにしても、動物起源の軽くて耐水性があり割れない袋類は、乾燥地域の移動のさいに水の携行用容器として安全確実なものであった。また、貝殻を用いる例も数多い（写真8）。

土器から金属製の器へ

18000年前にさかのぼるといふ土器作りは「人類が物質の化学的変化を利用した最初の出来事」であり、器として見れば、動植物素材利用の次の段階だろう。土器製の器、とくに水甕は、調理の場でも活躍し、火と水を扱う台所には欠かせない。民博所蔵の資料にも数多いがその多くは考古遺物や古い資料であり、彩色して置物としても併用される例を除けば、現在では

あまり使われていない。ただし、熱帯地域のメキシコやジャマイカ、エジプトやモロッコなどでは、素焼きの特性を生かし、表面にしみ出た水の気化熱により中味を冷たく保つ土器の壺が今でもよく使われている（写真9）。

また、インドにおける土器の使用は不浄観とも関わっている。カースト制の下では、唾液を介する不浄の伝達が忌避されるため、ヒンドゥー教徒は使い捨ての素焼き器を多く用いてきたと言われ、それが、インドで陶磁器が発達しなかった理由の一つと言う。

金属製のものとしては、銅製または真鍮製の水入れ、水差し、壺、湯沸かしなどが、東欧、中東、南アジア、中南米から収集されており、とくに、中央アジアから西アジアに特徴的なサモワールと呼ばれる湯沸かしのように、湯沸かしと兼用のものや、水差しの形状のものが多い。これらは、金属工芸技術が発達した同地域の特性を反映し、金属の乏しい色彩感を補うためか表面にメッキ（鍍金）、彫金、象嵌、ニエロなどの装飾が施されたものも多い。また、水差しは、脂っこい食材を手づかみする同地域の食事の際や礼拝前の手洗いにも用いられるが、必ずしも潤沢ではない水を用いるのに水差しという形状が適しているのかも知れない。他方、ネパール、チベット、ブータン、インドの銅製器は、聖水と関わる器が多い。

このように、その素材から器を見直してみるだけでも、地域ごとの環境とそれに応じた技術や水の利用のあり方を考えることができる。

